

特集

多職種で取り組む 最前線の集中治療

これまで、集中治療の“表舞台”はICUで医師が先端医療機器などを用いて行う救命治療でした。しかし現在の集中治療はPCASやPICSといった概念をふまえて、これまでの医療以上に治療後の生活の質の向上が求められるものになり、そのために医師・看護師・臨床工学技士はもとより、理学療法士などのセラピスト、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、歯科医師や歯科衛生士、そしてMSWなど、各専門職が総出でチームとなって取り組むことが求められる時代になってきています。そしてそれゆえに、より多くの専門職が集中治療の知識とスキルを共有することが求められるようになりました。また、このことはとりもなおさず、集中治療がICUという限られた場所で、限られた職種によって行われるものではなく、どこでも・誰にでも取り組むことができる、すなわち重症患者のよりよい予後のために、救急医療の延長線上で当たり前に行われる集中治療が求められているのだともいえます。

しかし、救急医療の最前線にいる若手医師や各専門職スタッフには、集中治療に対する苦手意識がある方や、詳しく知らないという不安がある方も多いかもしれません。そこで今号では、多種多様なスタッフが、たとえ集中治療が専門ではなくとも、さまざまな環境・場面で最善の集中治療に取り組んでいただけるよう、その最前線の知識や多職種連携の実践を整理する特集を目指しました。集中治療にかかわる各専門職の視点からその最前線の全貌を、とくに多職種のかかわりに焦点を当てて、わかりやすく解説いただいています。

多職種で取り組んでいくこれからの集中治療を見据えた“礎”となるような、本誌ならではの特集に至りました。ぜひ、明日からの臨床にお役立てください。